MfG_J_Person_in_Nagaoka_Mishima_Okujirou　　春日正利

～　もうひとつの評価

別名資料"G_add13_人物編_三島億二郎、"と同内容

序

1. 概要、明治以降の年譜

2. 版籍奉還、長岡洋学校、ほか
(1)知藩事奉還の剛腕
(2)ホクギンマンスリー　にいがた発　今昔歴史紀行・明治黎明編(2013年)
(3)その他の大きな貢献

3. 三島君碑

4. 戊辰に際して、三島億二郎の見方、私感
(1)今泉鐸次郎談
(2)長岡の維新の三傑

5. 高橋竹之介書　「三島億二郎追悼長句一編」

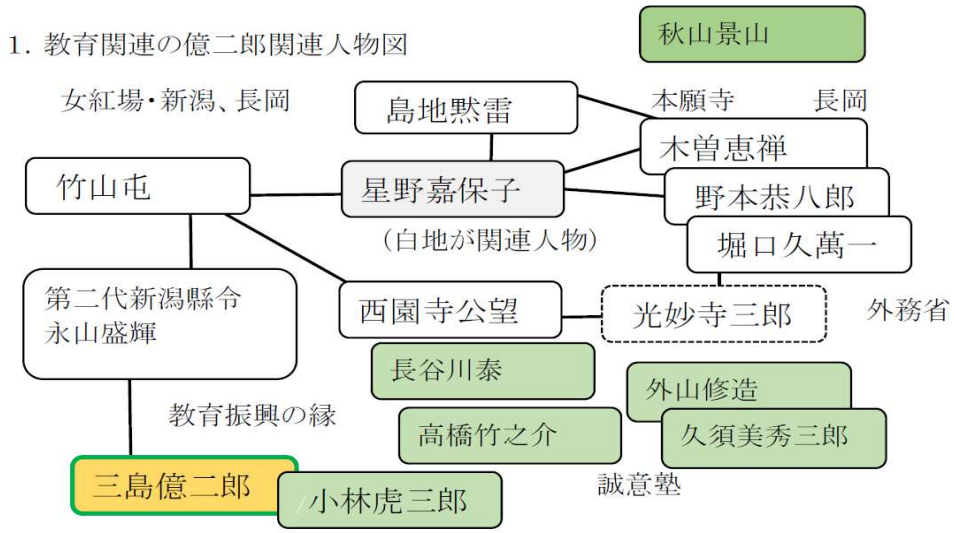
6. 三島億二郎顕彰法要の講演を聞いて(2023年3月)

序

長岡は、近年の、町の大半を焼失した二度の戦禍の中から立ち上がった、希有の町だと言われております。
その最初、戊辰の役からの復興の恩人として、何人もの人、そして名が残らなかった人が大勢いるわけですが、その中で、忘れてはならない人物に、三島億二郎をあげねばならないと思います。
「三島億二郎、もうひとつの評価」というサブタイトルをつけていますが、その本心は　4. 戊辰に際して、三島億二郎の見方、私感　にありますように、"長岡藩を消滅させた無念さ"と"何とかしよう"という熱意にあると思うのです。
　米百俵イコール小林虎三郎、というイメージがありますが、それは山本有三氏の戯曲のストーリーによるものが大半でしょう。劇中の、藩の伝説の儒者高野余慶筆による「常在戦場」の軸の前で反対藩士を説き伏せた名場面と、「明日の長岡は、子供たちに託すしかない」の名台詞の印象が強いのです。
大参事の小林虎三郎とともに「藩士への分配より新しい学校への投資」に賛同した人の中には、同じく大参事の三島億二郎、そして小参事の槇清記らがいたようです。　そして、なりよりも忘れてならないのは、お互い苦しい三根山藩に救援米を所望したのは大参事の三島億二郎であり、億二郎の三根山藩

説得が不首尾に終われば、「米百俵」はなかったのです。
　戊辰の役の「もはや開戦しかない」と総督河井継之助に決断せしめたのは、前島神社近くでの億二郎との会談が決定的だったかも知れませんが、その継之助が亡くなり、戦後の国漢学校設立以降、虎三郎も長岡を去った後は、三島億二郎が中心となります。対外的には新政府への借金棒引き交渉、旧藩では、とかく対立しがちな町人グループと旧士族グループをまとめ上げ、新しい長岡の復興に邁進します。そのような民衆救済、教育はもちろん、商業による経済再建の活躍の原動力が何であったか、知りたいです。

下図は、米百俵プレイスミライエ研修記録の中に示した、億二郎の教育関連関連人物図です。星野嘉保子の長岡における労働・教育貢献にしても、億二郎の第二代新潟縣令永山盛輝との人脈が、キーポイントです。
これなしには、嘉保子は大人物になれなかったのではないでしょうか。



1. 概要、明治以降の年譜

(1)三島億二郎の概要(1825～1892) ～ 長岡市郷土史料館 資料より

長岡藩大参事、古志郡長。長岡藩士伊丹市左衛門の二男。岡津川島家に入り、明治維新後、三島と改姓した。佐久間象山らに学び、ペリー来航の際は、浦賀に藩命で偵察に赴いた。戊辰戦争でほ、軍事掛として各地を転戦した。
戦後は、長岡の復興に尽力し、旧士族に産業を与え、学校を興し、民政を整えた。
また「ランプ会」を開いてよく人びとと交わった。晩年は北海道開拓に情熱をもやした。

He was Daisanji (dequty governor) of the Nagaoka clan and he adop the Koshi－gun(district).
The second son of Itami Ichizaemon, a Clan retainer of Nagaoka, he was adopted into another retainer family named Kawashima. Followlng the Meiji Restoration, the family name was changed to Mishima. Okujiro. studied under Sakuma Zozan and his followers, and when Commodore Perry arrived in the harbour of Uraga with his warships, he received orders to go to Uraga on a reconnaissancemission. Durling the civil war he participated in a number of battles as the official incharge of military affairs.
After the end of the war he worked hard for the recovery of Nagaoka, helping the families of clan retainers to set up businesses, restarting SChooIs, and reorganizing the civil administration. He also started up the ‘‘Lamp Kai”(Lamp Society) through which he was able to associate with many people. In his later years he showed great enthusiasm about the prospects offered by the colonization of Hokkaido.

(2)明治以降の年譜

三島億二郎と改名。
明治2年(1869年)、版籍奉還によって、長岡藩知事となった藩主・牧野忠毅は、牧野頼母、小林虎三郎、三島億二郎の3人を藩の大参事に任命した。
明治3年(1870年)の長岡廃藩に伴い、柏崎県大参事に任命された。

その頃、唐物商の岸宇吉邸にてランプ会、武士と町民、農民の会合。
こうしたつながりを支えとして三島は、士族授産のための産物会所(明治3年)・女紅場(明治9年)の創設を推進した。
明治11年(1878年)には岸宇吉、関矢孫左衛門らと共に、第六十九国立銀行(北越銀行の前身)の創設発起人となったが、この銀行は秩禄処分で士族が得た公債を資本としていた。

明治5年（1872年）　国漢学校の拡充や長岡洋学校の創設
明治6年（1873年）長岡會社病院(長岡赤十字病院の前身）の開設などの衛生行政
明治8年（1875年）　育英団体長岡社の創設

この間、三島は大区小区制導入によって柏崎県第三大区長、柏崎県廃止により
新潟県第十六大区長（明治9年（1876年））、古志郡長（明治12年（1879年））を歴任。

明治15年（1882年）、古志郡長を辞職した後は北海道開拓に傾注し、
明治19年（1886年）には笠原文平、大橋一蔵、関矢孫左衛門、岸宇吉らと
北越殖民社を開設。
明治25年（1892年）　　死去

ミライエ関連の　MfG_J_MIRAIE_NAGAOKA_museum.pdfも参照

240808_Skype洋学校と病院の資金は　　も含める
学制改革

新潟県柏崎県と三島億二郎、小林虎三郎

	新潟県	柏崎県	億二郎、虎三郎
明治元年			
			二人とも藩の大参事 版籍奉還願い出
明治二年			5月国漢学校仮校舎
			5月三根山藩から米百俵
明治三年			明治三年長岡廃藩(*1) 柏崎県大参事
明治四年			8月虎三郎　疎まれ東京へ
明治五年			明治五年11月 長岡洋学校の創設

(*1) 牧野忠毅の版籍奉還に関する太政官通達等
明治元年（1868）12月再興を許された長岡藩は
明治3年（1870）6月に版籍奉還願い出を許され、
同年10月に柏崎県に併合。
柏崎県は、1868年（慶応4年）に越後国内の幕府領・旗本領を
管轄するために明治政府によって設置された県および1869年
（明治2年）に越後国西部を管轄するために設置された県。
1870年（明治3年）10月22日 － 長岡藩の大部分を編入
　長岡藩消滅

明治3年10月22日をもって、 国漢学校廃校。 その後、年貢米過剰納付が判明
明治5年、年貢過納分の返却金から、長岡洋学校、長岡会社病院を設立。
　　ここでも、虎三郎の米百俵同様、億二郎は、分けろと詰め寄る旧士族らに
　　教育への投資を説いた。
億二郎、ランプ会の同志の力も借りて、学校の復活
県からの返還の米の代金の半分と周辺の村々から提供のお金で長岡洋学校。
さらに返還の米の代金の残りの半分を、国漢学校医学局をもとに、長岡病院。

2. 版籍奉還、長岡洋学校、ほか

(1)知藩事奉還の剛腕

長岡の大恩人の三島は多くの功績を残されましたが、特に著しい功績として、他藩に先駆けて断行した、知藩事奉還があると思います。(～「今泉鐸次郎談 長岡恢興の恩人　三島億二郎翁」によると、全国で13藩のひとつ。5%相当。)これにより、長岡藩の敗戦借金の棒引きとなり、後の改革に拍車をかけることができたのだと思います。いわば、旧宗主家の委託を受けた大参事の統治を残した形の民事再生法の申請をやつてのけた訳です

まだ幕藩体制の空気の残る中、この発想は、どこからきたのでしょうか。
13藩の大半は5万石以下の小藩とのことですが、この妙案が、同様な借金まみれの他藩に普及せず、5%の少数に留まったのは何故なのでしょう。
ぜひ、知りたいと思っています。

(2)ホクギンマンスリー　にいがた発　今昔歴史紀行・明治黎明編(2013)より

藩主の家禄が減ったということは、家臣の家禄も減ることになる。職制改革の最大の目的は家臣の禄高を減らすことにあった。長岡の場合、家老兼軍事総督だった河井継之助が戦争前に既に禄高改革を行っており、他藩に比べ門閥家老の力も落ちていた。この職制改革で家老職に相当する「大参事」に選ばれたのは牧野頼母、小林虎三郎、三島億二郎だった。牧野は門閥家の出だが、小林は禄高100石、三島は37石で２人とも旧藩政時代には「軽輩」と呼ばれた者たちである。河井の残した制度改革が門閥家老を弱体化させ、戦後の混乱と領地の削減が改革を急がせた。同じ時期、ほとんどの藩が大参事の職を旧門閥家にそのまま踏襲させている。長岡は困窮したが故に他藩より一歩先んじて改革に乗り出せたのである。

明治５（1872）年11月、慶応義塾から英学講師、藤野善蔵を招聘して、長岡高校の前身、長岡洋学校が開校した。奔走したのは三島億二郎である。明治３年に消滅した国漢学校の意志を継ぎ、小林虎三郎の意志を継ぎ、三島にとっては執念の奔走だったろう。この執念のおかげで既に独立性を失った長岡が、非常に早い時期に自前で学校を持つに至った。ちなみに、この明治５年から６年にかけての入学者は68名。その中には、小山正太郎（のちの明治洋画壇の先駆者）・小西信八（のちに東京盲亜学校校長）・根岸錬次郎（河井継之助の甥、のちに日本郵船ロンドン支店長）・波多野伝三郎（のちの福井県知事、衆議院議員）らがいる。

信じて強行した。この新築移転のさ中、支藩である三根山藩から百俵の米が届く。百俵の代金は270両あまり、新築費用の10分の１にも満たない額だったが、小林も三島も小参事の槇清記も、これを学校建築の費用に充てるべきとの意思を貫き通した。米の代金は主に教材費用に充てられたという。このことが後に作家山本有三により戯曲化され「米百俵」の逸話となった。百俵の米の値段よりも、次代を築くために多少の無理をしてでも人を育てるという、いわば時代を超えた思想、精神にこの話の価値がある。長岡という小さな町で起きた出来事が、今も多くの人の心を打つ由縁であろう。

だが、この学校は４か月後の同年10月、志半ばで廃校になる。長岡藩は全国に１年先駆け、自ら進んで廃藩を決定したからである。

◆◆ 長岡藩の事情

長岡藩が他藩に１年近く先駆けて廃藩を決めたのには、多少の経緯がある。三島億二郎が残した日記（東京行之記・東京滞在中之記）にそのあたりの事情が記されている。

長岡がこの頃、困窮の極みにあったことはこれまでにも触れてきた。三島ら藩首脳は政府に対し大規模な経済支援、有り体に言えば拝借米の支給を数度に渡り陳情していた。だが、それも明治３（1871）年９月25日に却下された。せめて来月ひと月分だけでも、という願いさえ届かなかった。三島ら首脳部はここで重大な決意をする。

◆◆ 知藩事奉還

同日夜、ふたりの使者が国許に発った。知藩事牧野忠毅（ただかつ―当時11歳）とその父で元藩主の忠訓（ただくに）に対し、政府より上京命令が下されたためである。

月が替わった10月15日、上京した忠毅は直ちに参内。三島は忠訓と会って「知藩事免職願いの草案」を提出した。忠訓は幕末と戊辰戦争を経験している。三島らとは謂わば修羅場をくぐった仲で、旧藩主と家臣というだけの関係ではなかったろう。彼ら首脳部の苦悩を十分過ぎるほど分かっている忠訓に異論などなかったと思う。

22日、知藩事免職願いは正式に受理された。これで長岡藩は消滅し、政府直轄地だった柏崎県の管下に入ることになった。三島らは自治権を放棄する代わりに財源を確保したともいえる。名を棄て実を取ったのだろう。まだ武士の風潮が当たり前に存在していた時代のことである。三島ら「軽輩」の発想による勇気ある決断と、私は思っている。

三島は政府の指示で柏崎県の大参事として県の首脳部に留まった。この事が後に大きな意味を持つことになる。

◆◆ 武士と町民

長岡藩の消滅により新築したばかりの国漢学校もまた消滅した。国が亡くなると、文化や教育も一時的に衰えるものだが、長岡の場合そうはならなかった。知識人たちが身分の差を越えて、ランプの灯りのもとに集っていたからである。

北越戦争を一言で総括すると、つまるところ長岡城の争奪戦だったということになる。戦場が城下だったことで町は焦土と化した。戦った武士と町を追われた町人との間にこの焦土戦をめぐる認識のギャップが生まれた。武士は国と民を守るため多くの犠牲を払ったと思っている。町民は武士が判断を誤ったために町は焼かれたと思っている。武士は町民を無知と決めつけ、町民は武士を生活無能者とさげすんだ。飢えと寒さで軋（きし）む人の感情が殺伐とした対立を生み、膨らませていった。

文政8年（1825年）、長岡藩士・伊丹市左衛門の二男として、
長岡城下の長町に生まれる。最初の名前は鋭次郎。河井継之助や
小林虎三郎らは近所の幼なじみであった。また、兄の伊丹政由は、
藩校・崇徳館の教授であった山田愛之助の指導で結成された「桶宗」
の中心人物であった。そのため、鋭次郎も河井や小林と共にこれに
加わった。
弘化元年（1844年）、長岡藩士・川島徳兵衛の養子となる。
川島家は30石の微禄であった（後に7石加増）。崇徳館の助教を経て、
嘉永2年（1849年）には江戸藩邸勤務となる。
江戸在勤中に、佐久間象山の塾に通うようになり、そこで
吉田松陰とも親しくなった。

版籍奉還を具申

明治2年（1869）6月、政府は各藩の版籍奉還を許し、藩主を知事に
任命します。長岡藩最後の藩主忠毅（ただかつ）は、牧野頼母（たのも）
、小林虎三郎、そして戊辰戦争後、姓を三島に改めた億二郎の3人を、
大参事に任命します。億二郎は、病弱な小林虎三郎に代わって、
まず藩士の生活を救済することから仕事を始めた。

（3）その他の大きな貢献
・長岡洋学校の設立
・長岡病院の設立
・ランプ会での、商人側まとめ役の岸卯吉らとともに、士族側まとめ役
。商業振興、第六十七国立銀行設立のメンバー

長岡赤十字病院　玄関前の
亀倉雄策さんのモニュメント
HIGH SPIRIT

長岡赤十字病院の東側の
三島億二郎像

3. 三島君碑

長岡市立阪之上小学校、「わたしたちの悠久山」第四版　より
三島君碑、碑文

三島君碑

正三位勲三等貴族院議員子爵　牧野忠篤篆額

三島翁、初メ鋭次郎ト稱シ、億二郎ト更メ、古狂又三洲ト號ス。本姓伊丹氏、出デテ川島氏ヲ嗣グ。後三島ト改ム。世世長岡藩ニ仕フ。資性謹厚和平、義ヲ重ンジテ堅忍、稍長ジテ文武兩ナガラ通ズル所アリ。河井繼之助、小林虎三郎、鵜殿團次郎等、當時ノ俊秀ハ皆其交友ナリ。二十五歲、野口氏ヲ娶ル。此歲江戸ニ勤仕シ、古賀茶溪、佐久間象山等名流ノ門ヲ叩キ、大ニ智見ヲ弘ム。嘉永癸丑、米艦渡來シ人心洶洶タルヤ、翁藩命ヲ受ケ、馳セテ浦賀ニ抵リ、其形情ヲ視察シ、次デ時務ニ就テ建言スル所アリシガ有司ノ忌諱ニ觸レ、譴ヲ獲テ歸藩ス。是ヨリ意ヲ藩政ニ斷チ、學舍ヲ邸内ニ設ケテ子弟ヲ教育ス。既ニシテ戊辰ノ役起ルニ及ビ、藩宰河井繼之助ヲ助ケ兵馬ノ間ニ馳驅スルコト殆ド半歲、事志ト違ヒ城市兵燹ニ罹リ、君臣流離士民四散ス。明治政府新ニ成ルヤ、翁擢ンデラレテ長岡藩大參事トナリ、此慘狀ヲ睹テ傷心痛恨ニ堪ヘズ、渾身誠ヲ效シテ主家ノ再興士族授産ノ途ヲ講ズ。明治三年藩主ニ説キ北越ノ諸藩ニ先ンジテ藩籍奉還ノ義ヲ奏ス。廢藩置縣ノ後、徵サレテ柏崎縣大參事トナリ、後又大區長古志郡長トナル。然モ官仕ハ其志ニ非ズ。幾モナク皆之ヲ辭シ、專ラ力ヲ長岡ノ恢興ニ用フ。國漢學校、長岡中學校、長岡社、長岡病院、女紅場、六十九銀行等皆翁ノ創設若クハ參劃セル所ナリ。而シテ翁ノ能ク是等事業ヲ成就セルハ、朝野ノ縉紳先生ガ翁ノ為人ヲ推重シ、常ニ援助ヲ惜マザリシニ由ル。翁又北海道拓殖ノ志ヲ懷キ、十九年北越殖民社ヲ起シ、老軀ヲ提ゲテ寒地ヲ跋渉シ、移民ノ為メ畫策スル所多シ。二十三年、帝國議會ノ開カルルヤ、衆議院議員ニ推サレシモ固辭シテ受ケズ。閒アレバ讀書釣魚以テ自ラ娛ム。然レドモ鄕黨ノ輿望益々其身ニ集ル。二十四年北海ノ瘴癘ニ中リ病篤シ。特旨ヲ以テ從六位ニ叙ス。後稍愈エシモ、二十五年三月二十五日、終ニ長岡ノ自邸ニ歿ス。年六十八。長岡ノ今日アル、實ニ翁ノ力ニシテ、翁ハ眞ニ長岡恢興ノ恩人ト謂フベシ。爰ニ後進一萬一千五百餘名相謀リ、碑ヲ悠久山ニ建テテ、永ク其人格ヲ敬慕シ其事業ヲ記念ス。

昭和二年十月

後進　正四位勲二等貴族院議員　橋本圭三郎　撰
後進　正四位勲三等功四級工学博士　小山吉郎　書

4. 戊辰に際して、三島億二郎の見方、私感

(1)今泉鐸次郎談

「今泉鐸次郎談　長岡恢興の恩人三島億二郎翁」の末尾の章において、翁が、戊辰の役で、どのような気持ちを持っていたか、について類推させるような記述がありました。(赤の囲み)

恥しい次第である、然し天下の雄藩を以てしても、櫻嶋、下ノ關に於ける外國との戰ひには數日を支ふることさへ出來なかつた、そうして見れば、我が國民は深く猛省すべき譯で區々國内に於ける甲乙の強弱を論ずべき時ではなからうといはれたといふことである。是等に依るも、

薩摩、長州が、欧州列強の攻撃に数日も耐えられなかったことは、惰眠を貪っていたということで、誠に恥ずべきことである。国内で甲乙の強弱を論ずるべき時ではなかろう。

～　前島神社の、継之助との会談でも、「どちらか負けてもいい。それより、早く決着すべし」と云うような覚めた目で、世の趨勢を見つめていたのではないでしょうか。
虎三郎、継之助の「熱」に対する、億二郎の「醒」を感じます。
ただ、やはり長岡を戦禍に晒したのは無念だった、という心でしょうか。

せられた。翁は長岡の一市民を以て任ぜるの人、爵位固より其志ではない。然し斯の光榮に浴しては、感激の情を禁じ得なかつたであらうと思ふ。

偉大なる一市民

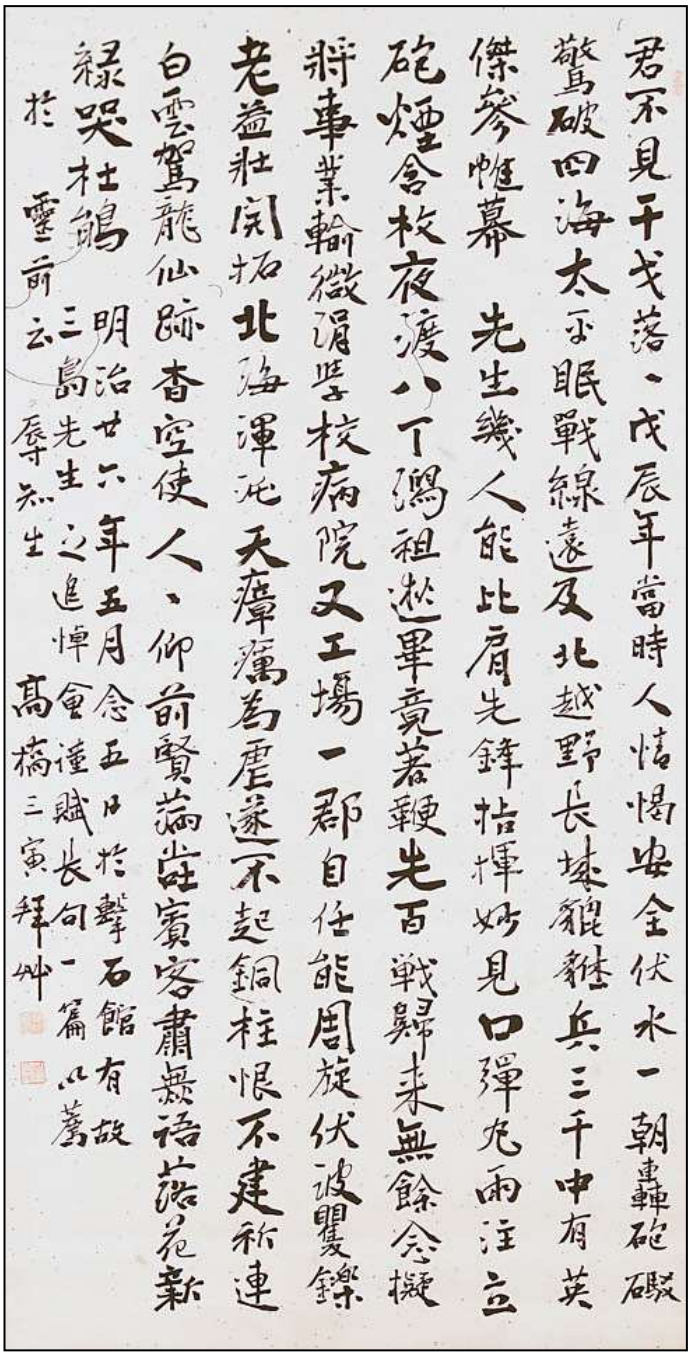
翁は大參事となり、大區長となり、郡長ともなられたが、然しそれは繰返していふ如く、長岡恢興の爲めといふ翁畢生の目的を達する上に於て已むを得ず官仕されたので、其志でないことは勿論である。翁は當代の大官と懇意で、故勝伯を始め今の大隈伯、松方侯、山縣公など、皆な翁と交り厚く、何れも翁の爲人には敬意を拂つて居られた。それ故、今でも翁の話が出ると、何れも翁は豪かつたと讃稱し、必らず三嶋さんといつて、さんの敬語を用ゐるそれの如くに、翁には敬意を表して居らるゝ。されば翁にして、苟も仕途に志があつたならば、相當切り出して是等大官連と伍することも、必らずしも不可能ではなかつたであらうと思ふ。然るに他近も長岡の一市民を以て自任し半生を一貫して長岡の恢興に盡瘁された處が、實に翁の豪い點である。確か明治十八年のことのやうに思ふ、翁が出京の際、山縣公に招かれて、三間正弘氏と公を訪はれたことがある。其折の相客は田中參事院議員(陸軍少將)と今の三浦觀樹將軍とで、戊辰當時には、何も北越の野に轉戰した人々である。公の考へでは、斯くして昔の戰話でもしやうといふのであつたであらうが、翁は力めてそんな話を避け、且つ長岡藩が強かつたといふ讃辭の辭に對し、因陋事に亟ぶ、唯だ藩主の命令を守つた丈のことで、誠に御恥しい次第である、然し天下の雄藩を以てしても、櫻嶋、下ノ關に於ける外國との戰ひには數日を支ふることさへ出來なかつた、そうして見れば、我が國民は深く猛省すべき譯で區々國内に於ける甲乙の強弱を論ずべき時ではなからうといはれたといふことである。是等に依るも、翁の性格、翁の識見が略ぼ窺ひ知らるゝではないか。翁の一周忌辰に會し、追悼會席上、今の牧野子爵が、花開花落任君風。生死人間見始終。只幾芳名傳後世。如君北越一英雄。と悼まれたが、翁を以て北越の一英雄といふ、決して溢美の言ではないと思ふ尚ほ翁に就ては語るべき多くのこともあるが、長岡商業史料としての翁の事歴としては、其大要を盡したことと思ふゆゑ、一と先づ是で結末を告ぐることに致しませう。

(2)長岡の維新の三傑
長岡の維新の三傑へのイメージをもってもらうため、双方のリーダ（産業、教育など）の対比の試み。

幕末、明治維新　薩摩藩、越後長岡藩のリーダ

島津斉彬(−1858)	牧野忠精・忠雅・忠恭 （−1837）（−1853）（−1857）
西郷隆盛	河井継之助 （戊辰の役でお家断絶）
大久保利通	三島億二郎
	小林虎三郎（米百俵）
小松帯刀	山本帯刀 （戊辰の役でお家断絶）

5. 高橋竹之介書　「三島億二郎追悼長句一編」
　　～　長岡市立中央図書館蔵


君不見干戈落々戊辰年當時人情惶安全伏水一朝轟砲礮
驚破四海太平眠戰線遠及北越野長埼鯨鯢兵三千中有英
傑參幄幕　先生幾人能比肩先鋒指揮妙見口彈丸雨注立
砲煙含枚夜渡八丁潟祖述畢竟著鞭先百戰歸来無餘念擬
將事業輸微眉壽校病院又工場一郡自任能周旋伏波矍鑠
老益壯閑拓北海渾沌天瘴癘為虐遂不起銅柱恨不建祈連
白雲駕龍仙跡杳空使人々仰前賢蒲崎賓客肅無語茫茫花新
緑哭杜鵑　明治廿六年五月念五日於聲石館有故三島先生之追悼會僅賦長句一篇以蒙
於　靈前云　辰寺然生
高橋三寅拜艸

明治26年（1893）5月5日、故三島億二郎(1825-1892)の追悼会での長句。
竹之介は、このとき51才で、十五才年下。 両軍が戦って四半世紀。
戊辰時、竹之介は、億二郎と、いわばライバルでありましたが、維新後、
各々が教育に従事したことで、追悼会に列席となったのでしょう。
竹之介の心のうちを聞きたかったですが、きっと、三島億二郎と同じく、
「どちらか負けてもいい。それより、早く決着すべし」と云う気持ちがあったと
思いたいです。 だからこそ、荒れてしまった明治に教育を植え付けようと
誠意塾に心血を注いだのではないかと思うのです。

6．三島億二郎顕彰法要の講演を聞いて（2023年3月）

(230326_三島億二郎顕彰法要講演・教育者三島億二郎メモ)
講演者は、第四北越ミュージアム開設責任者の井辺吉伸氏

栄涼寺の位牌堂　浄土宗
二度の戦禍も残ったお寺の本堂をぐるりと囲む位牌堂は、驚きの大きさ、
位牌の数。A4より少し大きな板に、十名近い戒名が並ぶ。 継之助の
河井家の位牌も見え、そこに継之助の戒名もあった。
浄土宗や禅宗曹洞宗では、位牌を祀る。
浄土真宗の場合は、亡くなるとすぐに仏になるという考えにより、位牌を用いず、
位牌の代わりに、法名軸や過去帳をお祀りする。

記念講演メモ・感想
（1）長岡の運命を変えた「前島の会談」
こうなってしまった以上、継サだけを死なせるわけにはいかない。
最後まで闘い、ともに死のう。
現代人からすれば不合理だが、剛健質実の藩風とみるべき、と講演者のお話し。
～　剛健質実は、旧制長岡中学でも校風となった。 それが五十六さんに
　引き継がれ「開戦やむなし」になったとしたら、歴史はあまりに辛い。
　槍隊の碑文の「虎三郎」の憤りの心を、どう受けとり、語りつぐか。
～　この複雑な心を、長岡の平和教育のストーリーに含めるべきと思いました。

（2）人々の信頼が厚く「非戦」を唱える億二郎が戦いに賛成
これにより、藩の意見が一気に「主戦」でまとまったとされる。億二郎は、この
時の自身の決断を深く後悔。戦争(継之助)を止められなかった罪をつぐなう
ため、尋常でない力で、残りの人生を長岡の復興に捧げた。
これが戦後の億二郎の自己犠牲、臥薪嘗胆の行動力であり、この億二郎
の精神がなかったら、長岡の復興はなかった。～　同感です。

（3）まず銀行
途中から関矢孫左衛門(並柳の地主)が経営に参加、初代頭取。支配人には
岸宇吉でなく山田権左衛門(三島の地主)が就任、創業半年後に二代目頭取。
協力を得た関矢孫左衛門、山田権左衛門は、ともに戊辰時は勤王方についた。
当時、新政府の銀行誕生など政策には、薩長閥が支配しており、三島らは一歩
身を引き、こうせざるを得なかった。
～　話を聞いて、晩年の億二郎の経済界活動における「一歩ひいた行動」が
理解できたように思う。億二郎は、まちの復興のために、地主のもつ絶大な信用
力を利用すべきと考えた。（懐の深さでもあるが、五十年前の長岡では受け入れ
られない見方で、オフレコ扱いだったらしい。）

(4)北海道開拓
明治19年、北越殖民社。 当時の北海道長官は、岩村通俊(精一郎の兄)で、
岩村通俊から多くの協力を得た。かつての敵から助力をもらうこととなった。
明治22年の暮れから翌年正月、64才の億二郎は、人足三人を従えて
山古志や長岡各村を周り、移住希望者を募った。1/11は小曽根、1/16は
摂田屋村。
～岩村北海道長官へは、当時の新潟県令・永山県令が橋渡ししたらしい。(*1)

(5)億二郎の考え
稲川前館長が残された話として、億二郎の考え方
『学問は修身である。自立、自尊の心を育てる事。
つまり他人に世話になることなしに自給自足を貫き、
貧しいからと言って誇りを捨てることなく、一生懸命努力する
前向きの精神が大切である。その精神を培う事こそが真の学問である。』

(*1) 億二郎と永山県令の縁は、もっと前にあった。
長岡洋学校が体制を変え、明治9年12月の長岡学校としての再出発開校式。
県令は「長岡の文の林に生立てる わか木は国のはしらとそなれ」と詠んだ。
洋学校の閉校から、新しい学校への再出発で、億二郎の心は如何ばかりか。

その歌は、長岡阪之上小学校の第一校歌の1番の出だしにあり、
そして、長岡高校第二校歌の3番の歌詞の中に、今も残っている。

長岡高校 第二校歌
第二校歌 昭和16年 創立70周年記念
作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

三、 歴史かがやく長岡の
文の林に生ひたてる
若木は国の柱ぞと
誓ひ男々しく奮ひ立ち
智育体育日も足らぬ
われらよ自由民主の子

阪之上 第一校歌
作詞 多田 正知
作曲 若林 孫次

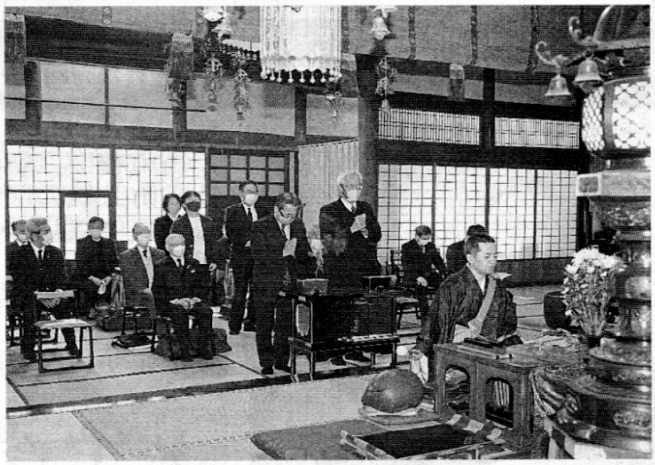
一 文の林に生いたてる
若木は国の柱ぞと
三葉の柏の緑そう
ここ長岡の阪之上

今泉鐸次郎_長岡恢興の恩人_三島億二郎翁(1914全)によれば、
長岡の女紅場設立に尽力したようです。金禄公債の下付も士族の商法で
資金を失うのを見て、なんとか生活の道をたてねばならぬと旧士族の
婦女子に内職を得させようとの意図があったとのこと。
もしかしたら女紅場運営方針と、星野嘉保子のあまりに厳しい教育方針
とが合わなかったのは、こうしたことが原因かもしれないと、ふと思いました。

翌日の新潟日報記事

2022年春の三島億二郎顕彰会設立準備当時から入会申し込みしておりましたが、ようやく今回、顕彰会の集まりの法要に初めて参加できました。記事写真の焼香中の人物の、右の白髪が筆者です。
たまたま背の高い目立った礼服姿の参列者ということで、掲載写真に撮られたようです。

年(令和5年)3月27日(月曜日)　(日刊)　新潟日報



三島億二郎の功績を後世に

地元で法要

長岡復興や近代化に尽力

明治の長岡に近代経済や教育の灯をともした三島億二郎(1825～92年)の法要が26日、三島の墓がある長岡市の栄涼寺で営まれた。子孫や市民約25人が参列し、戊辰戦争後の長岡の復興に尽力した功績をたたえた。

三島は長岡藩軍事総督の河井継之助、大参事の小林虎三郎と共に長岡藩の「三傑」と称される。大参事として、旧北越銀行や長岡高校、長岡赤十字病院の創設に携わった。

法要は、2020年設立の顕彰会が三島の命日の3月25日前後に行っており、4回目。参列者は本堂で焼香し、手を合わせた。

旧ホクギン経済研究所副所長で、現在は第四北越銀行で社史の編集を担当する井辺吉伸さん(54)が講話。市内の中学校で郷土史の教育に携わった経験などから「億二郎の精神は子どもたちに継承されている」と述べた。顕彰会からは、三島の功績をまとめた子ども向けの本の年内の出版を目指し、準備を進めていると報告があった。

参列した三島の子孫、伊丹耿一(こういち)さん(79)＝長岡市＝は「三傑の中では知名度が高くないので、新しくできる本に期待している」と語った。

写真＝戊辰戦争後の長岡の復興に尽力した三島億二郎の功績をたたえた法要＝26日、長岡市東神田3